第５回羽島市新しい時代の学校構想検討委員会　会議要旨

日　時	令和５年１１月６日（月）　１５時００分～１６時３７分
場　所	羽島市役所本庁舎　４階　第１委員会室
出席者	【委　員】 棚野委員長、松本副委員長、児山委員、廣瀬委員、田中委員、新井委員、長谷委員、木下委員、太田委員、長岡委員 【事務局】 森教育長、今井田事務局長、小川教育政策課長、山田同課長補佐、岡田同課政策係長、高橋学校教育課長、渡邊同課長補佐、岩田教育支援センター支援係長、岩田生涯学習課長、横山教育政策・学校支援専門員 【参　観】 教育委員会委員：１名 【傍　聴】 傍聴者：４名 【取　材】 なし
内　容	１　開会 ２　前回議事録の確認 ３　今後のスケジュール（案）について ４　議事（議事進行を委員長に依頼） **⑴　アンケート調査の実施概要について** **⑵　アンケート調査を踏まえた新しい時代の学校構想について** **ア　志を持ち心豊かに学びあう教育について** 事務局から資料を用いて説明を行う。 【委員】 本物に触れる活動や、多種多様な体験が「志を持つ」ことにつながると考える保護者の方々が多いことがわかる結果になった。Q7 の結果において、体験的な活動を優先する保護者の方が多い一方で、教職員の方の割合は低いことが気になった。体験的な活動を仕組む場合、計画立案から実施までの業務（外部講師との打合せや関係機関との連携等）を考えると、現在よりも仕事量が増えるため難しさを感じているのではないか。 ただ、学校という子どもが集まる場において、体験的な活動が行われることの重要性は高い。アンケート結果を見ても、地域の方も同じように考えており、地域の中で外部講師等を依頼できる仕組みがあるとよいと感じた。議事の「心豊かに学び合う」ためには、体験的な活動を通して、仲間関係の構築を目指すことが大事である。 フリースクールを運営していると、個人よりも集団で学ぶことで、共に活動しようという意欲が生まれ、仲間作りのきっかけにもなる。人間関係の中に多様性や流動性を担保することが必要である。 【委員】 羽島市が掲げている「志を持ち心豊かに学び合う教育」の実現に向けて、Q7 の結果から分かるように、「五感で感じる教育」が求められていることが分かる。

但し、体験的な活動や行事の充実は、先生方の負担増につながる恐れがある。その辺りをどのように捉えるか、考える必要がある。

私の知る事例では、学校の中に地域の方が常駐できる部屋を作り、その方が教科学習や体験的な学習におけるカウンターパートナーになり、学校と地域の連携を行っている。羽島市でもコミュニティ・スクールなどを活用して、学校の先生と地域の方をコーディネートする方がいると、体験的な学習がさらに進むのではないか。

他にも各学年1学級の小学校において、3年生から6年生までの4つの学年を5人の担任で担当するチーム担任制を行っている事例もある。このような事例がよいかどうかは別にして、子どもたちや地域の実態に合わせた学校は、望ましい教育環境という意味では参考になる。

【委員】

ある大学では、1年生から4年生まで異年齢でチームを組んで一つのプロジェクトを達成しようとしていると聞いたことがある。交渉や手先の器用さなど、様々なメンバーの得意分野を活かして、社会に出たときに活用できる能力の向上をねらっている。

他にも学生が先生を評価するシステムがあるとも聞いたことがある。

【委員】

Q5あるいはQ7の結果をみると、体験的な活動が重視されていることがわかる。特別支援教育を受ける子どもたちは、いわゆる机上での勉強が苦手な子たちが多く、体験を通して学ぶことが多い。そして「体験を経験にしていくことが大事」だと聞いたことがある。経験というのは、既習内容を生かして、考えていくこと。最近は体験が重視された活動を多く見るが、その後、どんな学びがあったのか、子どもたちと一緒に考え、意味付けしていく営みも大切である。

【委員】

体験的な活動や自然に触れることを優先する回答結果が出ているが、学校は勉学が一番だと思う。子どもの頃の記憶だが、興味を持ったことは、本を読んだり、隣の子に話を聞いたりして知識として身につけてきた。そうした知識を活用したい、試したいという思いが体験的な学習につながる。

体験的な学習や自然に触れることは重要だが、今の学校で、このような時間を生み出すことが可能なのか。どちらが大事というのではなく、どちらも大事なことである。

【委員】

Q5の結果において、最も優先度が高いものが「体験的な活動」、続いて「タブレット端末等の活用」となっている。学校現場では、よく「リアル（体験）」と「デジタル（ICT機器の活用）」という言葉が使われる。但し、子どもが南極の勉強をしたいと言っても、難しいためデジタルを使って学習を補うことがある。この二つのバランスが大事であり、アンケート結果にもあらわれている。

また、Q7の結果において「豊かな人間関係」を挙げている方が意外と多い。小規模校と中規模校が多い羽島市の中で、小規模校では、豊かな人間関係と言っても人数が少なく人間関係が固定化されているため、Q6にもあるように、異年齢による集団をどう生かすかということになる。小規模校では、異年齢による交流というのも、一つの可能性だと思う。今の時代なら、「リアル」と「デジタル」を駆使しながら、豊かな人

間関係を築くことも可能ではないか。こうした取組みが羽島市の新たな教育の特色になるのではないか。

【委員】
今回のアンケートは、あくまでも羽島市教育委員会の「志を持ち心豊かに学び合う教育」として必要なものを聞いている。体験的な学習は大切だが、学習における基礎基本の力の定着は、大前提である。
また、不登校の要因の一つに学校の授業についていけない、分からなくなったというものがある。そのため、学習における基礎基本の定着を目指しつつ、「志をもって心豊かに学び合う教育」として、体験的な活動であるとか、仲間との触れ合いを大切にできるとよい。ただ一方で、教えることが多すぎるオーバーカリキュラムにならないように気をつける必要がある。

⑵　アンケート調査を踏まえた新しい時代の学校構想について
イ　新しい時代において求められる学校教育制度、学校運営、学校配置等について
事務局から資料を用いて説明を行う。
【委員】
資料②の6ページの「『その他』の主な意見」に、「あえて少人数の学校を選択した」、「心身の負担になるのでクラス分けはしない方がいい」という意見があるが、不登校支援の専門家として、学校生活における人間関係の固定化や流動性の欠如は、心配な点である。クラス替えがないため人間関係の複雑化により、不登校となる事例も見てきた。だからこそ、人間関係の中に、流動性や多様性が生まれるような環境は大切である。アンケート結果にある1学年あたり2～3学級の選択が一番多いのも、常に入れ替わりがある環境を多くの人が望んでいる結果ではないか。
不登校対策という点でも、枠組みや既存のあり方を見直していくべき時が来ているのではないか。先ほどのチーム担任制の話があったが、他の地域でそのような事例があるのであれば見てみたいし、学べることもあるのではないか。

【委員】
Q9 や Q10 の結果において、「2～3 学級がよい」とあるが、小規模校でも現実的に実現が難しいとなると、教育政策的に桑原学園のように小と中を一緒にしようとか、あるいは小と小とを一緒にしようということに発展してくる。現状では、異年齢や近隣の小規模校同士で、例えばバス 1 台借り上げて、交流したり、オンラインで勉強したりするだけでも、豊かな人間関係や多様な考え方に触れることも可能である。

【委員】
議事⑵ア「志を持ち心豊かに学びあう教育」にかかわるアンケート結果と議事⑵イ「新しい時代において求められる学校教育制度、学校運営、学校配置等」にかかわるアンケート結果がリンクしており、人間関係を豊かにしていくためには、1学年の中に複数の学級があることが望ましいことがわかる。
ただ、その他の意見からは、自ら望んで小規模の学校を選択している子どもや保護者がいることもわかった。他の自治体には校区をこえて通学ができる制度的なものもある。本人・保護者から要望にあわせて、学校の選択肢を考えることも今後あるかも

しれない。
　また、小中が連携するような義務教育学校にしたとしても、全ての学校で複数の学級になるというのは難しいのではないか。小規模校も学校の選択肢として残ることになる。

【委員】
　Q7 の結果とつなげて考えると、教職員が優先してもらいたいことが、設備や教材の充実という結果が出ている。
　前回の会議でも、築 50 年以上の教育施設があることが課題になっていた。市の方で営繕や修繕の対応をしてもらっているが、今後もそういったことが多くなるのではないかと、心配している。

【委員】
　「心豊かな子」「豊かな人間関係」に着目して考えたとき、どのぐらいの人数が適正で、それを実現することができる地域もあれば、難しい地域もある。だから異年齢の集団ということも考えなければと思う。実現するためには、市の財政、国の制度、県教育委員会の意向等、様々な制約がある。また、今後の教育大綱や教育振興基本計画にも反映されるものである。
　適正規模・適正配置については、羽島市だけではなく、日本中で問題になっている。ある自治体では、行政主体で進めた結果、地域から大反対を受けたという話もある。その点、羽島市は今回のアンケートを実施したことはよいことである。
　アンケート調査から読み取れる将来の小中学校あるいは義務教育学校のあり方というのは、複数の学級があった方がよいということである。桑原学園校区や中島中学校区をみても結果として出ている。但し、現実、桑原学園で 2 クラスになるほど、子どもが増えるかというと、現実的ではない。そうなったとき、他の学校と一緒にした方がよいのか、オンラインだけでも繋がった方がよいのか、行事だけでも一緒に実施した方がよいのかということになる。例えば、小規模校の修学旅行は、1 人当たりの旅費が高くなってしまう。そうすると、近隣の小規模校同士で日程を合わせて一緒に修学旅行に行くアイデアもある。一緒に行事を行ったり、ICT 機器を使ったりするなども含めて考えていく必要がある。

【委員】
　若い世代が地元地域に戻ろうとした時、その地域の小学校の有無は大きな条件になる。我が子がバスなどに乗って遠くの小学校に行くとなると、親は地元地域に戻りにくくなる。そういう点では、地域ごとに小学校があることには意味がある。
　しかし、小規模の学校になると、単学級となり、固定化された人間関係を修正することが難しい場合がある。ICT 機器等を使うことで、どこまでこの課題を解消できるのか、そんな視点も必要になる。

【委員】
　小規模校では、固定化された人間関係が問題視されがちだが、悪いことばかりではない。県内にも、常に複式学級のある学校がある。人が少ないだけで、地域の方も子どもたちも先生たちも、自分たちの学校はとてもよい学校だと言っている。複式学級で大変な面もあるが、それ以上に良さの方が大きいという学校もある。

【委員】
保護者の方々の考え方は、アンケートの結果に出ている。人間関係づくりも学校施設も選択肢がある方がよいと思う。私はこれまで 2 度ほど転校したことがあり、その経験から、クラス替えがあることで、自分を変えるきっかけになった。

【委員】
そもそもクラスとは何なのか、というようなことから考えてもよい時代かもしれない。同じ年代だけでクラスを編成し、1年間過ごすという仕組み自体を見直し、考えてもよい時代かもしれない。但し、法律等もあるため、その中でどんな工夫ができるかを考えることが求められているのではないか。

⑶　喫緊の課題に対する進捗状況
事務局から資料を用いて説明を行う。
【委員】
メタバースによる指導援助は、多くの可能性を秘めていると感じた。不登校支援だけでなく、様々な場面で活用できるツールだと感じた。

【委員】
メタバースを使用する際、全く関係ない第三者が ID やパスワードを取得する危険性はないか。また、端末等を使用する際の通信料が払えない家庭の場合、どのように利用するか。

【事務局】
ID とパスワードは限られた者しか知りえない。運用時間も対象となる子どもも限られた活動となる。端末は子どもたちが学校で使っているタブレットを活用する予定である。電気料金はかかるが、家庭にある Wi－Fi に繋ぐことになる。実際に使う子どもの家庭に Wi－Fi 環境があるのかはこれから調査したい。

【委員】
休日文化部活動の地域移行の方も着実に進んでおり安心した。限定的にメタバースが利用されている間は問題ないが、使用する人数が増えていくとメタバースの中でトラブルのようなことが起こる可能性がある。今後も運用しながら課題を解決していけるとよい。

【事務局】
次回は先進事例等を踏まえた、審議をいただけたらと思う。
チーム担任制、学校と地域を繋ぐカウンターパートナーのあり方、学習集団のあり方、児童生徒が評価するシステムや、近隣の小学校同士が協働で学び合うシステム、学校の選択等についても調べていきたい。

５　その他
６　閉会